

「白井節」に励まされた38年 —大学院時代の思い出—

平尾 達夫

はじめに

「えーっなんで専門違いの私が学術論文の紀要に、よう分かれへんのに」といったん断りましたが、「長年の付き合いのうちの大学院生時代の思い出の寄稿でいいから」ということで、拙文で濁させいただくことにしました。ご勘弁願います。

院生時代からの畏友白井舒久名誉教授には、1979年の学校法人みどり学園の設立発起人会の発起人以来、みどり学園監事として23年間、そして、大阪健康福祉短期大学の開設時の2002年4月からは理事として大学の運営にも尽力されながら、教員として学生の指導にも当たられ、激務の毎日を送られました。そして今年3月に退職された後も理事としてまた経営委員としてみどり学園の発展のため尽力していただいております。

白井教授の本学での7年間の教員生活でとりわけ申し訳なく思ったことは、まず自宅が遠いにもかかわらず、神戸市の西の奥から2時間かけて出勤し、夜遅くまで学生への講義の準備、国際交流関係の仕事、科学研究費の申請事務等など、自宅に戻れず研究室や大学近くで泊ることも少なくない教員生活をされていました。しかもこの間に多くの学生を徹底して指導されたことです。ゼミや論文指導から、クラブ・サークルの立ち上げとその後の指導、放課後の帰宅途中の付き合いまで、すべての指導をただ言葉で励まされるだけでなく、生活難を極める学生には学費まで支援されるなど、物心両面からの手厚い学生指導には、私などどうして真似のできない接し方をされ、あらためて今日的学生指導として学ばせてもらいました。ほんとうにありがとうございました。

一方、すさまじいまでの気迫と情熱の人でありながら、飲みすぎて大切なものをカバンごと電車に忘れることも一度ならず、その底抜けに明るい楽天性に昔ながらの人間の魅力をますます深くもしました。

白井先生本当に永い間ご苦勞をおかけしました。これからはゆっくりとお過ごしください。いや、これま

でできなかったほんとうにやりたかったことをする生活を楽しんでほしいと思います。

1. 出会うのころ

私との出会いのエピソードは、JR 寺田町駅の近くのとある飲み屋から始まります。どちらも1946年8月生まれ、私の方が5日間先に生まれています。向かい合って飲みながら二人で人生論・生き方について議論し合っていたのですが、飲んだ勢いもあってだんだん激論になっていき、思わず私が相手の頬をバシッとやってしまったものだからバシッと返されたのです。飲み屋の主人も、周りの人たちも一瞬何が起るのかと視線を集中させ、不穏な空気に静まりかえりました。当の二人も周りの様子の変化にまたドキッとさせられたことがあったのです。しかし、このことがあってからかえって心が通じ合って38年の長い付き合いになったのです。

当時の大阪教育大学には名古屋から現奈良教育大学教授の岡本定男氏や埼玉から現鳥取大学教授杉山（奥野）隆一氏が来て大学院生を中心に教育・科学研究会を立ち上げる最中でした。もちろん研究会の拠点もなく、事務局としての作業やコピーなどは高濱介二先生（大阪健康福祉短期大学の初代学長）の研究室を使わせてもらっていました。秋葉現学長も当時機関誌『教育・科学』に心理学の分野から当時の中央教育審議会（中教審）の能力観についての批判論文を投稿されたり、宿泊研究会に参加するなどして力強い援助者となってくださっていました。秋葉先生が当時薦められていた本にバナールの『歴史における科学』というのがありますが、今でもバナールというと秋葉先生が重なってきます。その他、安保・沖縄・アメリカ地下核実験とめまぐるしい情勢の日々でした。

この頃の教・科研や院生協議会メンバーのなかでは、自然科学系は少なく、社会科学や学校教育系の人が多かったので、私の属する科学技術部は部員が少なかったのですが、その分執行部の活動に参加できま

した。

そのころ私は岡山の国立天文台の天体写真乾板のデータ処理をして論文を書きながらも、当時の自動車の排気ガス浄化装置の普及について関心があり、教・科研科学技術部の最初の活動として排ガス規制の進み具合の調査や大阪市内の自動車販売店へ実地に調査にいったりしました。今では当たり前前の装置になっている排気ガスを完全燃焼させるための触媒などもまだ製品化されてなくて、走る自動車の後ろからは白い煙、黒い煙がエンジンの種類に応じて様々に吐き出されていましたので、空はいつもどんよりとしたスモッグにおおわれている時代でした。家が幼稚園で生計を立てている身の私は、青い空を取り戻す仕事も子育ての仕事の一つであるとこの頃から思うようになり、現在はストップ地球温暖化の課題となっています。もちろん乗用車はこのごろではかなり普及してきましたが、10年前からハイブリッド車を使っています。

また、教育・科学研究会では各部ごとに研究をすることはもちろんですが、一つのテーマの下に全体で夏の宿泊研究会もしました。そして、当時その企画・準備から取り組んだことが現在の私の幼稚園教育の仕事の土台形成に繋がっています。実際、大学院の白井・杉山・岡本他の各氏との議論から始まり、スタッフ会議では宿泊研究会の記念講演をあの矢川徳光先生にお願いすることになり、その申入れなど渉外担当が私に回ってきたのです。専門は違っていました。当時有名な教育学の先生と聞いていたのでおそろおそろ電話でお願いしたら、以外に親切に対応してくださりほっとしたのを覚えています。従って講演に来ていただいたときには、本当に一生懸命ノートをとって学ぶことができました。自分で企画に参加していなければ、あれほど集中して学ぶことはできなかったかも知れません。

2. 二人で東京へ

大学院では教・科研の立上げ1年目の終わり頃、この頃から研究条件の劣悪さに対する要求運動の必要性が論議され、全国の院生協議会の運動に参加するための支部づくりも始まりました。研究室で黙々と研究するだけでは未来は開けない。しかし大学紛争のような大学封鎖ではなく、教員も院生もともにみんなで一つになってする要求運動から始めようと、立ち上がったのです。話は戻りますが、このころ「強力なメンバー

白井舒久が名古屋から来るぞ」と前述の岡本氏から聞き、みんなで期待していました。実際このころから院生協議会活動も活発になったのです。大阪外国語大学の院生の研究室にカメラを持って取材に行ったこともありました。また、全国院生協議会の統一要求の行動日が1971年11月に東京であるというので代表を派遣することになり、一人当たり千円のカンパを募り、執行委員会で白井・平尾で行って来いと決まったのです。夜行バスの一番後ろに乗って6時間かかりで早朝の東京大学構内の集会へ参加しました。このときの朝食は私の提案で「こんなときはビフテキよりも元気の出るのは野菜系や」ということでトウモロコシの醤油焼きを二人でかじり、実際睡眠不足をものともせず、二人で坂道を走り上ったりして元気を確かめ合ったりしました。

このことは、先日お亡くなりになられた「フジヤマのトビウオ」と称賛された古橋広之進さんの当時の主食がスイトン、マメカス、トウモロコシだったように、食べるのが精一杯の戦後では外国選手のような肉食はできなかったにもかかわらず、世界新記録を出されたことから頷けるのです。

こうして私たちは統一要求8項目の署名を持って大蔵省・文部省に行くことができたのです。「あの時は集会ではみんなねむっとったけど、我々二人が一番元気やったね。」と今でも懐かしく語り合っています。

3. 白井節に励まされて

教育・科学研究会、院生協議会などの活動を進めていく中では、科学技術論の杉山（鳥取大学）、戸坂潤、秋間 実の岡本（奈良教育大学）に、教育哲学・デューイの白井が加わってからというもの、急に各氏とも夜遅くまで飲んで活発に議論するようになったのです。最終電車に乗り遅れて帰れなくなり、下宿に泊めてもらったときもしばしばです。そんなとき名物の白井節がよくできました。哲学の論が高揚してくると人情論も顔を出すのです。

最後は

小倉生まれで 玄海育ち

口も荒いが 気も荒い…

になって踊り出すこともよくありました。

白井節とともにみんなで語り合ったものは、デューイが出てくるかと思うと情熱の詩人ハインリッヒ・ハイネに酔い、またあるときは三国志の天才軍師「諸葛

孔明」の戦略に熱くなる。そしてマルクス、エンゲルス、自然の弁証法、史的唯物論はもちろん、しまいには仏教の道元禅師や観音経まで飛び出す始末、「観音さんは娑婆世界で遊んでるんや。人を助ける仕事を遊びにしてるんや」「なんでもあそびにせなあかん。あそびになったときほんまもんになる。努力してやっているうちはまだまだなんや」など、とにかくよく飲んでよく語り、よく議論する空気になっていったのです。白井節の一つに

ふと見れば なんの苦もなき水鳥の
足にひま無き 我が思いかな

というのがありました。これはあとで分かったのですが道元の作で「唯見れば…」のようですが、これなど私の頭にこびりついていて、いまでもなにかあれば使わせてもらっています。

このように白井節の本質は周りの者を励ますことにありました。現状を憂いながらも本人に寄り添って未来に希望を持たせてくれるのです。東西の哲学を駆使して語りかけ、励まし、力を湧き起こさせるやさしさなのです。当時も白井ファンがまわりにどんどん増えていくのが私にも分かりました。同時にアカデミックな雰囲気もどんどん大きく広がっていきました。私もそんな空気の中で専門分野だけでなく、研究方法論的に関連性のある研究会にも積極的に参加しました。おかげで専門の狭い分野にいても、少しは視野を広げてもらったように思います。

当時「五分野の会」(学者・研究者・医師・宗教者・法律家の会)というのがあって、その関係で参加したように思うのですが、日本科学者会議の大阪支部の会では、唯物論哲学者の見田石介先生を中心に、現在は日本科学者会議大阪支部代表幹事をされている理論物理学者の菅野禮司先生や哲学者の鯨坂 真先生がおられました。私が参加した時はちょうど物理学者武谷三男の科学の方法論(3段階論)を検討中でした。見田先生は「3段階論は科学ではない」などと批判されていました。武谷三男は昨年のノーベル物理学賞に輝いた益川敏英先生の師匠ともいえる「自然の無限階層論」を唱えた唯物論物理学者坂田昌一先生の同輩だったと思います。当時は全共闘運動に一定の影響を持っていたので、批判されたのかもしれない。

当時私は身の程知らずにも、あの見田先生に自分の専門分野から武谷の「ニュートン力学の形成の分析」を紹介して

第一段階(現象論的段階) ティコブラーエの精密な観測 個別的な事実の記述の段階

第二段階(実体論的段階) ケプラーの3法則の段階 現象が起こるべき実体的な構造を知り、現象が整理されて法則性が得られる段階

第三段階(本質論的段階) ニュートンの万有引力の法則の段階 諸実体の相互作用の法則の認識であり、実体の必然的な運動から万有引力という不変的な法則が導き出される段階。

そして、この三つの段階が螺旋的に進む。つまり、一つの本質論は上の螺旋から見れば一つの現象論として進む。

などと自然科学の弁証法的側面について発言したことを覚えています。今から思うと顔が赤くなりますが、しかし、民主的な研究会ですから教授だからえらい。院生だからえらくはないではなく、発言の正当性で議論できる。そういう雰囲気がありました。そうはいつでもやはり見田先生はえらくて院生は未熟なのは事実ですが、そういう空気に暗示をかけられたのでしょうか。なにか自分も研究者と同じく、対等に発言させてもらいました。見田先生はその発言を静かに聴いてくださったのです。また、菅野先生には一昨年大阪市立科学館の行事でお会いし、「素粒子間の交換力のうち斥力はキャッチボール説で説明できるけれど、引力の説明を古典力学的にすることはむずかしいですね」などと話す機会がありましたが、38年前のことがよみがえってとても懐かしく思いました。

さて、白井節で飲んだ帰り道の定番は、「専門分野に打ち込む時間がほしかったね。」でした。教科研や院協の立ち上げの活動に加えて、学費と生活のためのアルバイトがかなりの時間を占めていたからです。このことはずーっと今日まで続いています。「人生の夕暮れまで来たのに専門分野の研究には縁がなかったね。」私の場合はもう限界であったのですが、彼ほど力量があるのに時間がなかったのは、さぞかしくやしい思いでいっぱいだったからでしょう。専門で京都大や東京大の大学院に挑戦していれば、夢はきっと果たせたと思います。しかしその道を選ばなかった。たとえ清貧になろうとも覚悟で、彼の思想にふさわしい道を選択されたのです。この決断は、今かえって彼の人としての大きさを示しているのではないかと感じています。それにしてもみんななんであんなによく飲んだのかは今でも謎です。

4. みどり幼稚園と「一身二生」

話は前後しますが、東京へ二人が派遣されたときの朝食がトウモロコシの醤油焼きだった訳ですが、あのときすぐに私の提案を理解してくれたのには少しいきさつがあるのです。

当時よく飲んで帰れなくなってみどり幼稚園の管理棟といっても私の家によく泊りました。そのとき私のうちでは玄米菜食をしていたのです。しかしまるっきりのベジタリアンではなく、小魚や鰹節などは良く食べました。そんな時いっしょによく食べたのが、玄米ご飯に鰹節を振り掛けて食べた食事が思い出深いのです。贅沢なものにはなにもなかったのですが、一宿一飯の恩義と喜んでくれました。当時の学徒の身ではそんなに栄養豊富な食事はしなかった、いやできなかったのですが二人とも体はとても元気で、ほとんど病気はしませんでした。これはいまも続いていると思います。痩せ具合も若いときとほとんど変わりません。このときの食べ方の哲学が今も続いているからかもしれません。このときの食べ方は、大げさに言うと自然の弁証法的食べ方。つまり「生物の個体発生は系統発生の歴史を凝縮してたどる。」が示すように、系統発生における進化を推進させた地球上の諸元素、諸成分が、結局個人の健康増進の材料としても有効であるという論理です。そこで、

① 一物全体食

頭から尻尾まで残さず食べる。魚は鰯などの小魚、米なども玄米で胚芽も胚乳も丸ごと食べる。活動のレベルは違うけれど、脳髓の働きに必要な成分をもれなく、無駄なく摂る事ができる食べ方です。

② 生食

生命の進化に必要であった地球の成分を、同様に固体の成長や健康にも必要として取り込むには、熱や化学調味料で破壊することなく、有効なまま体に取り込む方法です。しかし、人間はなんでも生食という訳にはいかないので、食べられるものは限られるから、身近な方法としては生野菜食でということになるのです。

③ 旬食

この食べ方は言うまでもありません。おいしく食べられることでみなさんよくご存知の方法です。

他にも皮膚で食べるというのもおかしいですが、温泉浴も母なる地球の有効成分の一つの食べ方かもしれません。ただし源泉掛け流しのピュアなものでないとむずかしいところです。塩素入りの温泉に入って、あとはビールをのんで、うまいものを腹いっぱいではかえって健康をそこないます。

ということで、当時から私は玄米菜食をメンバーの人たちに進めていました。現奈教大の岡本教授などは当時の下宿で「玄米を洗ったのはいいけれど、炊き忘れたら芽が出ていてびっくりした。」とって小さなみどりの葉が出ている玄米を見せてくれたこともありました。白米は時間とともに腐っていきますが、玄米は生命力を静かに秘めているのです。

そして、この食べ方の一番説得力になったのが、明治22年生まれで103歳まで生きたみどり学園（みどり幼稚園）の創設者・園長平尾マサノ、私の祖母だったのです。物理的な「一身二生」つまり一つの体で50歳の定年まで公立学校に勤め、それから百歳までは私立幼稚園の保育・経営と二回、二人分の仕事人生を生きたと意味です。今と違ってまだ百歳といっても少なかった時代に健康に生きて、95歳まで園長の仕事をして、人生を二人分まっとうしたのですが、その手段の一つが食にあったということです。祖母は喜寿の年ぐらいからはじめていたように思います。それまではリュウマチや狭心症の治療によく医者通いをしていましたが、その後は知らず知らずの間に通わなくなっていきました。

食の力の大きさとともに、祖母が私たちの鰹節ご飯を食べている姿を見て「白井さんはとてもいい人やね」としみじみ言っていたことが目に浮かびます。泊りに来た友人たちのなかでも、少しのふれあいの中で年の違いを越えてよく声を掛けてくれていましたので、祖母にもあたたかな思いやりの心が伝わっていたのでしよう。

5. 大阪へ来たほんとうの理由

名古屋から、埼玉から、千葉からと当時の大阪教育大学大学院に集まってきた院生たちは、教育学の高濱研究室で学びたいという大きな目的があったことは確かだと思います。高濱先生のまわりには当時、汲田先生や現日本共産党中央委員会副委員長の石井郁子先生がおられました。もちろんわれらが秋葉先生もお若くしておられました。そういう人的魅力いっぱいの

大学院でしたから、ある意味では当然のことだと思います。

しかしです、昭和47年3月に白井実行委員会委員長で一番に私が結婚してからというもの次々と結婚が続いたのです。それもみんな同じ実行委員会形式の結婚式でした。家-家結婚に反発して、結婚する二人の合意を大切にす意味の結婚式を演出したかったのです。実行委員長も交代でやりました。そして、もう一つの共通点があるのです。それはお嫁さんになる相手がみんな大阪教育大生だったということです。私の伴侶は理科教育、白井、岡本両氏は国語教育、杉山氏の伴侶は学校教育学で学んでいた人です。私たちみんな教・科研や院生協議会の立上げ、組織づくりに毎日奔走していましたし、修士論文の研究時間もないほど忙しく活動していましたが、およよよ…なのであります。全員ほぼ同じ時期に教育大生をちゃっかり娶ったのです。「あのときの超がんばりのエネルギーはいったいどこから出てたんや。みんなやることはきちんとやるやないか。心配ないわ。」とだれかがいっていました。

最後に、私たちの院生時代の熱い思い出はここに書き尽くすことができないほど膨大なものがあります。書き終わりかけても、あれも書きたかったこれも書きたかった。あの続きをもっと書きたかったと、次々と思いが思い出を呼んで芽づる式に記憶が湧いてくるのですが、それでは際限がありません。このあたりで区切らせていただきます。

なお、白井先生について知りたい方は、ぜひお近づきになってください。そして直接会ってお話してください。そうすればすぐにその人となり、今も若かった当時のままで伝わってくることを保障します。

おわりに

畏友白井名誉教授とめぐり合い、同じ院生生活するなかで多くの議論や激論ができる空気が生まれました。みんな夜が明けるのも知らず熱くあつく未来を語り合いました。そんな中で、専門分野の違いが逆に私を狭い世界から広い世界に引き出してくれたように思います。以来38年もの長い時間が経過しましたが、その間職場が違うので年に一二度しか会えない年もありました。しかし、7年前にこの短期大学を設立するために、手を貸してほしいという杉山理事の要請に応えることができたのも、一方で白井理事が短大教員

として協力してくれる。彼の近くでともに働けるのなら、という期待があったからにはかなりません。事実この7年は院生時代のように飲んだり、なつかしい白井節を聞きながら議論もできたことは、苦しい経営の中にあっても、私にとってこの上ない癒しになったのです。

これからもどうかみどり学園の発展のために、そしてそこで働くすべての教職員の未来のために、理事として尽力していただくことを心よりお願い申し上げます。

(ひらお たつお 本学特任教授)